日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

日本赤十字九州国際看護大学・地域看護学実習Iのプログラムおよび指導法に関する検討

メタデータ	言語: ja 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2013-01-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 酒井, 康江, 松尾, 和枝, 宮地, 文子, 蒲池, 千草 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15019/00000072

著作権は本学に帰属する。

報告

日本赤十字九州国際看護大学・地域看護学実習Ⅰのプログラムおよび指導法に関する検討

酒井康江[1)]　松尾和枝[1)]　宮地文子[1)]　蒲池千草[1)]

日本赤十字九州国際看護大学（以下、本学と略す）・地域看護学実習Ⅰのプログラムと指導法の改善を図る目的で、平成 18 年度に地域看護学実習Ⅰを履修した 4 期生 122 名の実習目標評価表と実習終了後質問票から、実習目標達成度の自己評価と実習目標の達成に関連する要因を分析した。その結果、わが国看護系大学カリキュラムの地域看護学実習内容（在宅看護分野を除く）に対応させて筆者らが設定した地域看護実習Ⅰの 5 つの目標に対する 20 の小目標について、学生は 19 の小目標を「できた・よくできた」と評価し、うち 4 小項目は特に高い学習達成感を示した。評価が低い小目標は、学童･思春期と成人期の健康管理システムの理解で、本来は学校保健や産業保健分野の実習施設で経験する項目であった。実習目標の達成を促進する要因として、健康教育の企画・実施の体験、保健師による家庭訪問の同行、保健事業への参加、さらに保健師等実習指導者から得た説明や助言を挙げていた。また実習最終日の学内報告会で、実習上で体験できなかった内容の理解を深めていた。今後の実習目標達成度向上に当たっては、①健康教育の企画と実施、家庭訪問への同行、多様な保健事業への参加、②実習後の学内報告会の充実、③学生が理解しやすい実習小目標の提示とオリエンテーション、④学生の実習目標達成度の客観的評価の実施について、さらに工夫する必要性が示唆された。

キーワード：地域看護学実習、実習到達目標、健康教育、家庭訪問

Ⅰ　はじめに

保健師養成校数 183 校のうち、4 年制大学は 144 校（78.7%）[1)] あり、学生数でいえば 12,429 人中、10,069 人（81.1%）[1)] が 4 年制大学に在籍している。つまり保健師養成は 4 年生大学(以下、大学とする)が担う時代になった。一方、大学卒業直後の保健師就業者の割合は、8,091 人中 517 人（6.4%）[2)] と 1 割にも満たない。そんな中、大学カリキュラムにおける、地域看護学は地域で生活する人々の健康問題や地域のヘルスシステムの理解を全ての学生に期待している [3)]。また地域看護学実習では、学生が地域看護学の理論と多様な分野に活動を拡大している保健師の実践を統合し、地域看護を担う看護職の役割と機能を体験学習するプログラムづくりと指導が必要となっている。しかし現実には、保健師活動をイメージしづらく生活体験に乏しいと言われている学生 [3)] を前に、それは容易なことではない。

本学では平成 15 年度から保健所と市町村において地域看護学実習Ⅰがスタートし、その後 4 年間にわたりワークブック作成など可能な修正を重ね、内容の充実をはかってきた。しかし、国の保健施策や地域保健活動を取り巻く諸条件の変化、県内の看護系大学の増加、併せて本学の新カリキュラム検討も踏まえ、より効果的な実習プログラムと指導方法を検討する必要がある。

そこで、平成 18 年度地域看護学実習Ⅰを履修した学生の実習目標達成度の自己評価から、今後の実習内容と実習指導上の課題を検討した。

Ⅱ　地域看護学実習Ⅰの概要

1．実習施設と実習生

本学の地域看護学実習Ⅰの実習施設は、福岡県下の保健福祉環境事務所（以下、保健所とする）、政令市、市町村に大別され、県内の看護系大学等で組織する実習連絡協議会において調整･決定されている。最近は、保健福祉の統合や市町村合併、また看護系大学の増加により、その調整は年々困難を極めている。過去 4 年間の実習施設数と学生配置数は**表 1** に示すように、実習施設は年平均 35 施設で、学生は保健所・政令市・市町村のいずれか一施設に 2～5 名の

1）日本赤十字九州国際看護大学

表1　過去4年間の実習施設数と学生配置数

		保健所	政令市 福岡	政令市 北九州	市町村	計
15年度	施設	12	5	7	8	32
	学生	38	21	27	25	105
16年度	施設	13	5	0	16	34
	学生	48	33	0	48	129
17年度	施設	13	5	7	10	35
	学生	32	24	19	30	105
18年度	施設	12	5	8	14	39
	学生	34	23	21	44	122

グループで配属されている。

2．実習プログラム

1）実習の目的および目標

本実習の目的は、4年間同一で“地域住民の健康の保持増進の支援や健康問題の発見や対応方法、ならびに地域保健問題の総合的な解決方法について、行政機関に働く保健師の視点で学ぶ”としている。

実習目標は、①保健所・市町村の役割機能について学ぶ、②保健師活動の目標や対象、支援方法を理解する、③保健問題の把握方法や問題解決方法を理解する、④ライフステージや健康レベルに応じた健康管理システムを理解する、⑤生活の場で健康増進活動を行うことの必要性と課題について考えることができる、をあげている。

2）実習単位と期間

実習単位は2単位（90時間）で、期間は10日間（学内2日、学外8日）、実習時期は3年次後期（10月頃）から4年次前期（6月頃）である。

3）実習内容

表2に示すように、実習前には学生に学習課題を提示したり、実習後は指導保健師（以下、指導者とする）宛にレポートや評価表を送付し、指導者評価を実習プログラム改善等に生かしている。

家庭訪問は原則として指導者との同行訪問を1回以上経験することとし、不可能な場合は、指導者から提供される事例をロールプレーすることにより学習の機会を得ている。家庭訪問の対象種別は**図1**に示すように多様であり、実習施設場所による特徴がみられる。

健康教育は、住民を対象に1回以上経験することとし（時間は20～30分程度）、不可能な場合は、指導者のもとで企画書のシミュレーションを行っている。

表2　実習の内容および事前事後学習等

時期		内容
実習前	1～2ヶ月	**学生はワークブックで事前学習。保健所実習生**は、夏休みに保健所で他校と合同のオリエンテーションを受講。 教員は、施設毎に実習指導者と実習のすすめ方を調整。
	1～2週間	教員は、指導者から届く「実習計画表」と「健康教育記録1」を学生へ配布し助言する。学生は事前学習・健康教育準備に取り組む。
実習中	1日目	**学内オリエンテーション。** 学生は事前学習・健康教育準備を行う。
	2日目～9日目	学生は、各自の実習計画にそって実習。
	10日目	**学内報告会**（実習地区の特性を発表、テーマ別ディスカッション）
実習後	1週間	学生は指導者にレポートおよび実習自己評価表を送付。
	～約1ヶ月	指導者は学生の実習評価をする。
	約1ヶ月～	教員は学生と実習プログラムの評価。

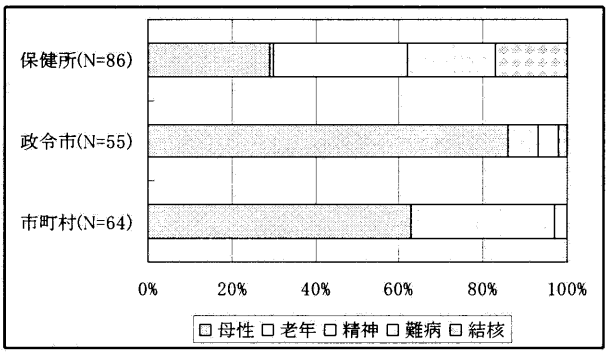

図1　過去4年間の実習施設別家庭訪問の対象種別

健康教育の対象者およびテーマは**表3**に示した。

4）過去4年間の指導方法の改善点（**表4**）

学生記録や指導者との意見交換に基づき、指導方法を改善した。主な改善点として、ワークブックの提示や健康教育実施前の指導強化等である。

Ⅲ　調査方法

1．調査対象

平成18年度実習生（4期生）122名。

2．調査内容

1）実習目標評価表

これは、学生に対して前述した5つの実習目標に対する小目標20項目（図2参照）について「**5:非常に**

表 3　過去 4 年間の健康教育の対象者およびテーマ

対象	テーマ	年度 15	16	17	18
母子	不慮の事故予防、発育・発達、虫歯予防、ベビーマッサージ	8	4	7	5
成老人（精神疾患・難病患者含）	生活習慣病予防（高血圧、心臓病、糖尿病、がん、肥満）	2	5	2	4
	メタボリック	0	0	1	6
	風邪・インフルエンザの予防	1	2	6	2
	高齢者の夏の過ごし方	1	3	0	0
	痴呆予防	1	0	0	0
	介護予防（転倒予防、口腔ｹｱ）	3	3	3	3
	骨そしょう症	0	1	1	1
	効果的な睡眠	0	1	0	0
	正しい薬の飲み方	0	0	1	0
	貧血	0	0	0	1
	ストレス解消法	1	0	0	0
	ストレッチ準備体操	1	3	6	4
	感染予防（エイズ・結核）	1	5	1	4
学童	性教育	1	2	1	0
	禁煙、薬物乱用防止（シンナー・アルコール）	2	3	1	1

良くできた、4:良くできた、3:できた、2:あまりできなかった、1:できなかった」の 5 件法順序尺度により自己評価し、その評価点を選択した理由を自由記述により求めた。

2）実習終了後質問票

これは、実習目標達成を促進する要因として考えられる事項、実習目標 1、記録物等補助教材 4、実習環境 1、健康教育等経験内容 3、指導者・教員 2、総合評価 1 の計 12 項目に対して「5: 強くそう思う←→1: 全くそう思わない」の 5 件法順序尺度により自己評価し、その評価点を選択した理由を自由記述により求めた。

表 4　指導者の意見要望、実習内容の改善点

	指導者の意見および学生の記録	15年度	16年度	17年度	18年度	指導方法の改善
−	学生が時間厳守できない	→				オリエンテーションの強化。
	学生が実習で学びたいことを事前に知りたい	→				学生は課題ﾚﾎﾟｰﾄを事前に指導者に提出。
	学生の事前学習不足	→	→			ワークブックを事前学習の課題として提示。
	学生間のﾓﾁﾍﾞｰｼｮﾝや学力の差	→	→			
	健康教育の企画書を実習前に作成して欲しい（実習時間への影響を減らす）	→	→			実習開始前に、指導者や教員の助言のもと企画書を準備。
	健康教育の実施を必須にすべきか			→		健康教育の目的と意義について指導者へ理解をはかる。
	記録物（内容が不十分、記入方法わからず）		→	→	→	実習記録の個別指導、記入例の事前配布、3年生前期の演習（地域看護学Ⅰ）で実習記録（様式4～6）を使用。
	カンファレンスで学生の主体性がない			→		オリエンテーションの強化、記録様式の改善。
	教員の巡回が少ない			→		巡回の目的と時期について共通理解を図る。
	教員の巡回が多い				→	
＋	「学生が熱心」「記録物は内容・量が適切」「健康教育による学びは大きく実施する価値がある」					「実習目標達成のための行動指標」「地域看護学実習Ⅰ前・中・後のフローチャート」を配布（平成１７年度から）。

3．分析方法

1）実習目標評価表について

各実習目標の平均点から、学生の実習目標達成度および実習施設間における達成度の差異を検討した。有意差検定には分散分析を用いた。さらに自由記述の分析は、評価平均点が“高かった項目・低かった項目・有意差があった項目“について検討した。

2）実習終了後質問票について

各項目の平均点および自由記述から、実習目標達成の促進要因について検討した。

4．倫理的配慮

実習最終日の報告会当日、本調査の目的およびデータの分析と公表に当たりプライバシーの保護に十分配慮すること、協力の有無により学生は不利益をこうむることがないこと、所定の場所に提出するこ

とにより同意とみなすこと、を口頭で説明し同意を得た。また本学の研究倫理審査の承認を受けた。

Ⅳ 結果

1．実習目標評価表について

学生122名の自己評価における実習小目標20項目の達成度評価で、評価平均点3.0以上を標準目標度とすると、20項目中19項目が該当していた。さらに平均評価点4.0点以上を「達成度良し」とすると、該当する項目は「7 各保健事業の企画」「18 生活者として健康問題を考える必要性」「19 対象に応じた保健指導の必要性」「20 対象を取巻く環境の中で支援する必要性」の4項目であった。それら評価平均点が高かった項目の選択理由をみると、いずれも実際の保健事業に参加・見学できたこと、指導者からの指導・アドバイスを受けたこと、健康教育や家庭訪問を行ったことをあげていた。(表5）一方、平均評価点が3.0点以下と低かった項目は、「15 学童期・思春期・青年期の健康管理システム」の1項目、3.5点を下回ったのは「16 成人期の健康管理システム」の1項目であった。これら評価平均点が低かった項目の選択理由をみてみると、実習期間中に実際の場面に遭遇しえなかったこと、講義や教科書のみの学習になっていたことをあげていた。(表5）

実習施設別に実習小目標の達成度を比較したところ、「1 保健所の役割機能」で保健所実習群が政令市および市町村実習群に比して有意に高く（$p<0.01$)、「2 市町村の役割機能」「14 育児期の健康管理システム」「17 老年期の健康管理システム」で市町村実習群が保健所および政令市実習群に比して有意に高かった（$p<0.01$)。また「7 各保健事業の企画」では、政令市および市町村実習群が保健所実習群に比して有意に高かった（$p<0.05$)。(図2）これら有意差があった項目の選択理由をみてみると、実習期間中の事業参加や見学の有無が関連していた。(表5）

表5　実習目標評価表評価点選択理由

	実習小項目	評価	評価理由
1	保健所の役割機能	＋	保健所実習中に学べた。保健所では経験できなかったが、報告会で他のグループの発表を聞いて学んだ。
		－	保健所実習で経験できなかったので、今ひとつ理解に欠ける。
2	市町村の役割機能	＋	市町村実習の中で学べた。市町村実習ではなかったが、報告会で他グループの発表を聞いて理解した。
		－	市町村で実習しなかったので理解しがたい。
7	各保健事業の企画	＋	各保健事業に参加・見学して理解できた。plan-do-seeにおける保健師の役割を理解できた。健康教育を実際体験して理解できた。保健師の指導・助言・アドバイスから理解した。市町村で実習しなかったが報告会での他グループの発表で理解した。事業の企画書を見て学んだ。学内の事業・演習で学んだ。
		－	なし
14 17	育児期の健康管理システム 老人期の健康管理システム	＋	市町村実習の実際場面から学んだ。実際の場面には触れなかったが、市町村実習グループの発表から理解した。
		－	保健所実習では実際場面に触れられなかった。
15 16	学童・思春期・青年期の健康管理システム 成人期の健康管理システム	＋	なし
		－	経験できず、カンファレンスでも触れなかった。講義で学んだが実習では体験できなかった。教科書で自習した。
18 19 20	住民の生活感覚で健康問題を考える 対象に応じた保健指導 対象を取巻く環境の中で支援する	＋	健康教育や家庭訪問で理解した。保健師の事業展開場面から理解した。保健師の指導・助言から理解できた。報告会のデスカッション深まった。自分の住む地域生活の振り返で理解した。多くの事業に参加して理解した。
		－	なし

＋ 5件法順序尺度の「3」～「5」
－ 5件法順序尺度の「1」「2」

2．実習目標の達成促進要因について

実習終了後質問票に回答のあった103名について分析した。実習目標の達成促進に関して評価点4以上（強くそう思う、そう思う）の回答者が8割以上を占めた項目は、「3 学習環境」「4a 健康教育」「4b 家庭訪問」「5 学びの多い実習」「6a 指導者」であった。一方、評価平均点は3以上あるものの、評価点4以上の回答者が6割以下の項目は、「1 目標理解」「2a 学内オリエンテーション」であった。(表6）自由回答からその理由をみてみると、実習目標が“わかりにくい、イメージがつきにくい、範囲が広い”、オリエンテーションの“時間配分が適切で役に立たない、説明がややこしい”等があった。(表7）

表6　実習終了後質問表

	平均点	標準偏差	4点以上者の割合(%)
1目標理解	3.6	0.7	53.3
2ａ学内ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ	3.7	0.9	66.9
2ｂ記録物	4.0	0.8	74.7
2ｃﾌﾛｰﾁｬｰﾄ	4.0	0.9	73.5
2ｄ報告会	3.9	0.7	74.0
3実習環境	4.3	0.9	84.1
4ａ健康教育	4.4	0.9	86.4
4ｂ家庭訪問	4.3	0.7	82.8
4ｃｶﾝﾌｧﾚﾝｽ	4.0	0.9	70.8
5学びの多い実習	4.5	0.7	88.1
6ａ指導者	4.3	0.9	83.3
6ｂ教員	4.1	0.9	75.7

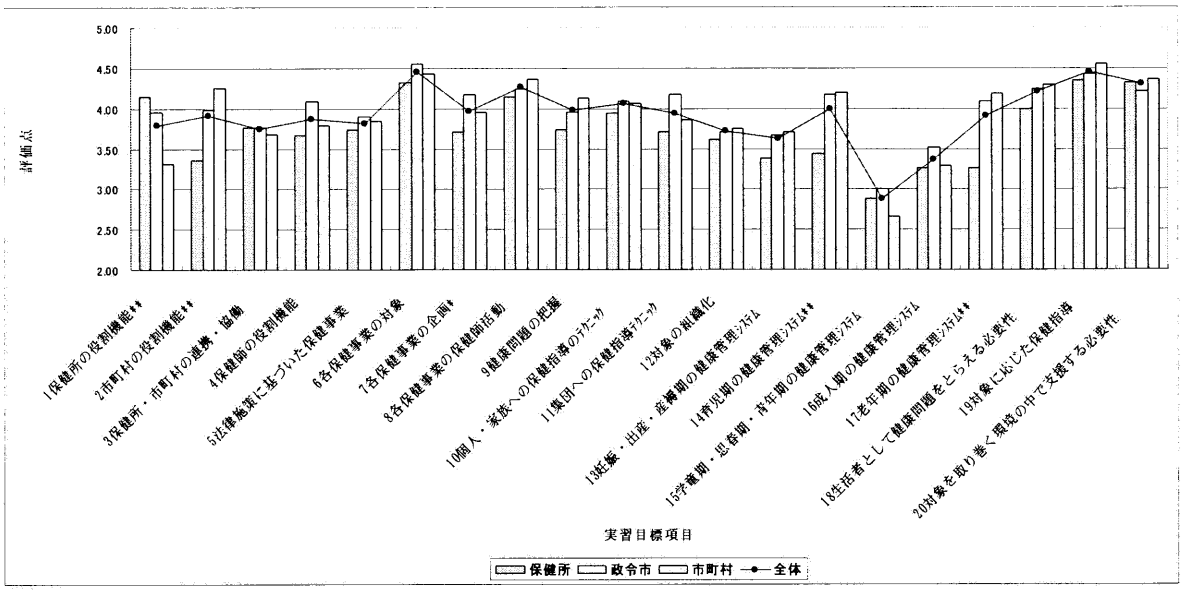

図２　実習施設別　実習目標平均評価点

N=122（保健所 n=34、政令市 n=44、市町村 n=44）** p<0.01、* p<0.05

表７　実習終了後質問票評価点選択理由

評価項目	評価	評価の選択理由
1実習目標	＋	評価指標が細かく具体的。毎日の実習目標に役立った。カンファレンスやレポートに役立った。
	－	目標達成しにくい内容があった。広範囲でわかりにくい。具体的にイメージしにくい。健康管理システムの概念が難しい。
2a学内オリエンテーション	＋	実習中に何を見ればいいか整理できた。実習前の心構えができた。他領域の実習に比べて丁寧。授業と実習の時期が離れているのでオリエンテーションは必要。
	－	時間配分が悪い。役に立たない。何をすればわからない。記録の詳細な書き方の説明が欲しい。必要だがややこしい。
3学習環境	＋	分からないことに対する説明や助言があった。多くの事業に参加できた。多数の実習指導者が関わってくれた。保健師のデスクの横で活動をみられた。広い部屋を確保してもらえた。
	－	学生専用の部屋が欲しかった。終日スタッフと同室で緊張した。実習指導者に質問しやすかったが、物理的に離れておりコミュニケーションンが取りにくかった。
4a健康教育	＋	デモンストレーションも本番も学びが多かった。楽しさ・難しさを知った。住民を前にして熱が入った取り組みができた。専門分野を深めかつ常識も学べた。保健師が住民と接する目線がわかった。住民の状況やニーズを把握することの大切さを学んだ。実施しないとわからないことが沢山あった。現場で実習する必要がある。授業より学びが深まった。最も頑張った。
	－	実施することで精一杯だった。本番までにもう少し時間が欲しかった。
4b家庭訪問	＋	家族を対象とする保健指導技術を学んだ。各ライフステージへの関りを学べた。家庭訪問での保健師の役割機能を学べた。在宅看護との共通点や違いを学べた。保健師のコミュニケーション技術を学べた。生活を考慮した関わりを学べた。
	－	経験できず残念だった。授業に比べて具体的に考える必要があり大変だった。もう少し経験数が多いとよい。
5学びの多い実習	＋	人として大切なことを学んだ。法律や保健事業に興味がわいた。保健師だけでなく関係者・関係機関の連携場面を知ることができた。地域で生活する人々を支援することの重要性や難しさが理解できた。保健師の仕事に興味がわいた。今までの実習で一番学びが多かった。病棟ではできない体験だった。教科書・授業では学べないことを学んだ。充実していた。
	－	学びたくないこともあった（興味がない・活かしたくない）。日々の勉強が大変だった。もっと時間があれば保健師の役割機能の学びが深められた。
6a指導者	＋	とても熱心で情報や資料提供も多かった。学びやすい環境を提供してくれた。毎回カンファレンスで指導・助言をいただいた。いつでも質問できた。
	－	質問すれば答えてくれるが、忙しそうで質問のタイミング'が難しかった。指導内容がわかりにくい。忙しそうでカンファレンス時ないしか話せない。コミュニケーションが取りずらく、学生控室が遠距離なため援助が受けにくかった。

＋　5件法順序尺度の「3」～「5」
－　5件法順序尺度の「1」「2」

V　考察

平成 18 年度地域看護学実習Ｉの実習評価表および実習終了後質問票の分析から、今後の地域看護学実習Ｉにおける実習指導上の課題を以下に考察した。

１．実習目標の設定と学生の目標達成自己評価について

本学の地域看護学実習Ｉは、２単位（10 日間）中に、学内オリエンテーションと実習報告会を含めて実施している。そこで示している５つの実習目標および 20 の実習小目標は、現行の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の保健師看護師統合カリキュラムで在宅看護学実習を除く大部分を包含している。

実習指導では、実習目標を 20 の小目標に具体化し、学生評価や指導者との意見交換をふまえ、指導方法の工夫を重ねてきた。その結果、学生の自己評価による実習目標の達成度は、評価平均点 3 以上を標準目標度とすると、20 項目中 19 項目がそれに該当し、大多数の学生が実習小目標の学習ができたと評価していると考えられた。特に「保健事業の企画」「住民の生活感覚で健康問題を捉える必要性」「住民の健康問題に関する知識・認識・態度に応じた保健指導の必要性」「住民を取り巻く生活環境の中で支援する必要性」の４つの小項目については高い学習達成感を有していることが判明した。一方、「学童期・思春期・青年期の健康管理システム」、「成人期の健

康管理システム」に関する学習達成感が低かったのは、これらを重点的に取り組んでいる学校保健と産業保健の分野は、現在講義で押さえることはできても、現場実習できていないことが原因と考える。

また、実習施設別にみると、「保健所の役割機能」「市町村の役割機能」「育児期の健康管理システム」「老年期の健康管理システム」「各保健事業の企画」では、保健所、政令市、市町村における実習群で差異があり、各実習施設地域が担っている地域保健活動の役割の違いを反映していた。

以上のことから、８日間で１人の学生が保健所・政令市・市町村のいずれかで実習し実習目標達成度で「学習できた」と自己評価できるには、学校保健および産業保健の実習が不可能な条件下においては、今が限界に近いと考えられる。

２．学生の実習目標達成を促進する要因について

実習目標達成度の自己評価および学習促進要因に関する調査票の自由記述の内容から、学生の実習目標達成を促進する要因を考察した。

実習目標達成の自己評価基準に関する自由記述から、実習小項目別、実習施設別の両者においても、健康教育の実施や家庭訪問への同行を含めて実際の保健事業に参加・見学を経験し、さらに指導者からの指導・アドバイスを得た経験が学習を深め、実習目標の達成感を高めていた。特に実習終了後質問票から、実習目標達成に健康教育や家庭訪問が、大きく関連していることが判明し、健康教育や家庭訪問は、保健師スキルを学ぶ機会として絶好の機会になっていると考えられた。また、指導者等受け入れ側の学生への配慮が、学習意欲を高めていると考えられた。これらの結果は、木村[4]の「健診や健康相談などの保健事業や健康教育の企画実施、家庭訪問に同行する体験をとおして多く学びが得られた」とする意見や、その他地域看護実習のあり方をめぐる所論[4~6,10]や先行報告[7~9]とも、一致した結果となった。

３．今後の実習指導上の課題

以上から、今後本実習の目標達成度をさらに高めるために、以下の試みが示唆された。

①今後も学生が実習期間中に、多様な保健事業に参加し、健康教育や家庭訪問を主体的に体験する機会が得られるよう、指導者に理解と協力を求める必要がある。春山[5]は「指導者に対し実習指導マニュアルの提示や研修会・説明会の開催」が大学側の実習体制強化に必要と述べており、本学においても参考にしたい。

②学生の多数が実習最終日における他のグループの報告から、“経験し得なかったことも他のグループ発表で学びえた”と回答しており、学内報告会の意義を確認できた。ＡＶ機器の活用や本番さながらの様子を演出するなど発表を工夫させ、講義や演習での学びとの統合を図り、学習成果を強化することが重要であると考える。

③実習目標やオリエンテーションに対する学生の意見から、更にわかりやすい目標づくりと実習行動指標の作成等、学生の効率的な学習を促す指針の作成とオリエンテーションの充実を検討したい。

わが国の看護教育基礎教育のあり方をめぐる諸検討のなかで、全国保健師教育機関協議会は、「保健師教育の技術項目と卒業時の到達度（案）」[11]を作成して、時代の要請に応える教育の到達度を検討している。本学においてもこれらを参考して、実習目標達成度の客観的評価方法を検討し、その測定結果を踏まえた実習目標と指導方法の検討が必要である。

Ⅵ　まとめ

本研究は、年々地域看護実習施設の確保が難しくなる福岡県下の状況と、学内における新カリキュラムへの移行にあたって、地域看護実習の効果的運営とさらなる充実をはかることを目的に実施した。

しかし、学生の主観的自己評価データのみの分析だったことは、本研究の限界であった。

今後は産業保健や学校保健の実習も視野に入れた取組みも考えられるが、学内外の動向を踏まえ今回の調査結果を各年の実習要項の見直しと改善に反映する努力をしたい。

Ⅶ　謝辞

本報告にあたり、実習指導にあたっていただいた保健師の方々、調査に協力をしてくれた本学学生に、心からお礼申し上げます。

受付　2007. 9.25
採用　2008. 5.30

文献

1) 日本看護協会出版会編：平成 18 年看護関係統計資料集. pp11-12、東京、日本看護協会出版会、2006.
2) 同上. pp36-39.
3) 金川克子：学士課程における保健師教育. 日本地域看護学会誌、9(1)：13-15、2006.
4) 木村裕美、小野ミツ：地域看護隣地実習における個別目標自己評価と実習指導方法の検討. 日本看護学会誌、14(2)：109-117、2005.
5) 春山早苗：行政保健師分野に関わる実習体制の整備と保健師の役割. 日本地域看護学会誌、9(1)：16-17、2006.
6) 石田千絵、河原加代子、高石純子、入江慎治、杉本正子：統合カリキュラムにおける地域看護学実習のあり方-保健所・保健センターにおける 4 年間の実習の経過報告-. 日保学誌、7(3)：139-147、2004.
7) 工藤節美、宇都宮仁美、時松紀子、大村由紀美：看護の視点の広がりを育成するための地域看護学実習-実習効果を上げるための特徴的な取り組み-. 大分看護科学研究、5 (2)：21-26、2004.
8) 大川聡子、松尾理恵、和泉京子、都筑千景、佐々木八千代、上野昌江：地域看護学実習における学生の学びとその到達点の検討. 大阪府立大学看護学部紀要、12(1)：93-101、2006.
9) 渡辺昌子、牧内忍、川崎道子、宮地文子：地域保健看護実習方法の改善への課題. 沖縄県立看護大学紀要、8：55-62、2007.
10) 勝又浜子：保健師教育における実習の位置づけと今後の課題. 保健婦雑誌、56(4)：306-310、2000.
11) 全国保健師教育機関協議会保健師教育検討委員会：保健師教育の技術項目と卒業時の到達度（案）の提案. 保健師ジャーナル、63(11)：1000－1006、2007.

Regional Nursing Training " I " Program and Evaluation of the Guidance Methods

Yasue SAKAI,M.HES.[1] Kazue MATSUO,M.Ed.[1]
Fumiko MIYAJI,Ph.D.[1] Chigusa KAMACHI,Ed.M.[1]

The regional nursing training " I " enforced in 2006 as a practical nursing training program is an attempt to improve the guidance methods. The evaluation sheets with questionnaires were provided for 122 fourth year students and collected after the training. Thereafter, the factors related to the self-evaluation of the training accomplishments and the training goals were analyzed.

As a result, regarding the regional nursing training college curriculum content of the Japan's nursing system (excluding the home-care field), the students have commented "good" or "very good" for 19 out of 20 sub-goals of the 5 main goals of local nursing training, and also they have evaluated "very good" for 4 sub-goals.

Sub-goals in which they had low evaluations were originally practical things they had to receive in the facilities for school hygiene and industrial health in order to understand the students and teenagers' health care system and the adult's health care system.

Main factors to promote the achievement of training goals were mentioned as follows; sanitary education to students that was planned and enforced, home visits that were conducted by public health nurses, the participation in the activities that were enforced in various institutions and explanations and advice were provided by public health nurses.

In addition, at the college conference that was held after the training, a deeper understanding was obtained about the contents which could not be acquired during the training.

Some actions suggested to achieve training goals in future are as follows.

1. Planning and enforcing the health education, accompanying for home visits and participating in various health duties.
2. Providing enrichment to the reporting society after the training.
3. The presentation and the orientation of training sub-goals which students are easy to understand.
4. The necessity of devising more objective evaluations regarding the student's training goals.

Key words: Regional Nursing Science Training, Training Goals Accomplishment, Health Education, Home Visits, Health Center

1) The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing